

教育長 様

校番 33 府中 高等学校長
(全日制 課程)**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和3年度 実施報告書****1 学校の教育目標等**

(1) 教育目標

一人一人の生徒が、学校生活のあらゆる場面において主体的・自律的に取り組むことを通して、将来の夢の実現に向けた進路目標の達成を確実にサポートする学校

(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力

ア 育てたい生徒像

(ア) 物事を多様な見方・考え方から深く学び、将来の目標を実現できる生徒

(イ) 主体的・自律的にねばり強く取り組み、困難な状況においても、果敢に挑戦し続ける生徒

(ウ) 他者を思いやり、他者と協働しながら、社会に貢献できる生徒

イ 育成を目指す資質・能力

(ア) 読解力

(イ) 論理的思考力

(ウ) 表現力

(3) 学科等の特色

入学時から具体的な目標を設定し、仲間と切磋琢磨しながら、学習だけでなく、学校行事や部活動、清掃等の学校生活のあらゆる場面において、主体的・自律的に取り組むことを通して、自らの強みを理解し、弱みを克服して、将来の夢を実現する生徒を育てる学校。

2 研究の概要

(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標

各教科・科目等で学んだ資質・能力を実際の問題解決に活用するために、総合的な探究の時間を核にして、「考えるための技法」を身に付けるとともに、教科・科目等の知識・技能が有機的に結び付き、外部指導者や地域人材の助言や評価を踏まえ、学年で段階的に、生徒一人一人の読解力、論理的思考力及び表現力の向上を図る。

(2) 3年後の目指す学校の姿

難関国公立大学 20 を含む国公立大学 100 の合格者数の実現とともに、生徒が主体的・自律的な学習を進め、読解力、論理的思考力、表現力を身に付けることができるようサポートする学校。

(3) 令和3年度の目標

ア アウトプット (活動指標)

1 学年の総合的な探究の時間において、育成を目指す資質・能力のうち読解力の向上を中心に据え、先行研究及び新書等に触れさせ、現代社会への疑問や批判的視点を持たせる。並行して、単元シラバスにおける目標とルーブリック評価を改善し、教員による評価及び生徒による自己・相互評価を活用し、生徒の学習状況を適切に評価できる。

イ アウトカム (成果目標)

(ア) 民間テストの指標である読解力、論理的思考力及び表現力が高いレベルにある生徒の割合が 20%以上になっている。

(イ) 模擬試験（1学年11月）の3教科（国・数・英）平均偏差値50以上の割合が+4%（7月比）になっている。

(4) 令和3年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名
総合的な探究の時間

イ カリキュラム開発の概要

総合的な探究の時間を軸として、探究活動を行っている。具体的には、「問い」を立て、それを「論証」し、レポートや論文という形として「論著」する。また、論証したことを「発表」といった流れとなる。これらの活動の中で、本校が育てたい資質・能力である「読解力」、「論理的思考力」、「表現力」を育成するカリキュラムの開発を行っている。

1年目として始動し、主に1学年に向けて「読解力×問い」の授業を総合的な探究の時間の中で展開している。「問い」を立てる際に、文献や先行研究を読むことになり、文章や図表、グラフの読み取りは避けて通ることができない。このとき、主に必要となる力が「読解力」であると考え、問いを立てられるまでの読解力の育成を1年次に行うことにした。

具体的には、表1のような内容の授業を展開した。これらの授業を考える上で、様々な書物や研究を基に慎重に吟味しながら、授業で行う内容を担当者がチームで精選していった。問いを立てるまでの読解力育成は、表1①～⑤のように、文章や図表・グラフの基礎的なものから始まり、表1⑥の「レポートの査読」、表1⑦の「論文を読む」により、探究活動へと導いていった。問いを立てる段階では、総合的な探究の時間の担当者だけが関わるのではなく、広島大学の学生と全教職員が生徒を担当し、問いの精査を行った。

表1「読解力×問い」の授業

① 文章の読み取り
② 意見と事実を見極める
③ 映像の読み取り
④ 図の読み取り
⑤ グラフの読み取り
⑥ レポートの査読
⑦ 論文を読む
⑧ 問いを立てる

ウ 校内体制

実行委員会と総合的な探究の時間プロジェクトチームとの連携により、カリキュラム開発を行った。前述のとおり、問いを立てる段階の生徒との面談を全教職員が担当して行った。

(5) 学習評価

短い期間の評価のサイクルとしては、実施直後の授業の評価をポートフォリオや行動観察から行い、次の時間の授業づくりの参考としていった。

資質・能力が育成されたかの評価とその育成カリキュラムが有効であったかの評価は、事前・事後テストを用いて行った。1学年では、「読解力×問い」のカリキュラムが始まる前に「読解力テスト」を行った。そして、カリキュラム後にもう一度、事前のテストと同等レベルの事後テストを行い、その正答率に有意な差があるか評価した。

民間テストの全国集計（無学年）と本校生徒（1学年）の結果との比較では、特に創造的思考力の正答率が10%ほど低い結果が見られたため、マスタールーブリックの尺度の項目に創造的思考力を検証する指標となりうる文章を取り入れていきたい。また、マスタールーブリックに則った評価と民間テストの結果との比較では、大きな相関が見られなかった。原因の一つとして、マスタールーブリックの尺度の各レベルの定義に曖昧な表現が含まれていることが挙げられるので、マスタールーブリックの尺度のレベルの定義を、極力教員間でブレがなくなるような表現に修正して、改善することを検討している。

(6) カリキュラム評価

2(5)に記載したように、事前・事後テストを用いて評価を行った。

3 令和3年度の成果及び課題

(1) 成果 (2) 課題

ア カリキュラム前後に行った「読解力テスト」について

昨年度までとは違い、「読解力×問い」の授業が展開され蓄積できたことは大きな成果であった。生徒の現状を踏まえ、文献や論文などから「読解力とは何か…」という根底から作り上げている。それらが読解力の養成に有効であったかを検証する。「読解力×問い」のカリキュラム前後に行った「読解力テスト」について分析した。「読解力テスト」の内容は「基礎読解」「指示読解」「図表読解」「論理読解」「接続読解」「総合読解」の6つの分野に分け、出題している。表2は、事前・事後テストにおける問題数（満点）、平均点、正答率、 t 検定における p 値を記載している。事前テストの平均点と事後テストの平均点の差が統計的に有意か確かめる

ために、有意水準2%で両側検定の t 検定を行った。

表2 事前・事後テストの結果

	問題数 満点	事前テスト 平均点(得点率)	増 減	事後テスト 平均点(得点率)	p 値 $p<0.02$
基本	4	2.79 (69.8%)	↗	2.96 (73.9%)	0.074 —
指示	4	2.61 (65.2%)	↗	2.88 (72.0%)	0.004 ◎
図表	4	3.25 (81.3%)	↘	3.05 (76.4%)	0.008 ×
論理	3	1.80 (60.2%)	↘	1.62 (54.1%)	0.031 —
接続	3	1.88 (62.6%)	↗	1.97 (65.7%)	0.258 —
総合	7	5.01 (71.6%)	↗	5.71 (81.6%)	0.000 ◎
合計	25	17.35 (69.4%)	↗	18.20 (72.8%)	0.002 ◎

まず、テストの合計点の平均が向上しており、その差は $p<0.02$ であり、カリキュラムの前後の平均点の差は有意であることがわかる。すなわち、読解力が向上したことはゆるぎない事実として捉えてよい。分野ごとに見ると、指示読解、総合読解の2つで平均点が向上し、その差が有意であった。しかし、図表読解では、平均点が低下し、その差が有意であった。また、基本読解、論理読解、接続読解の3つでは平均点の増減が見られるが、その差は有意ではなかった。全ての分野を向上させることができなかったことは、次年度の授業開発の課題である。特に、図表読解に関しては、授業改善を検討しなければならない。

「読解力×問い」のカリキュラムの評価については、生徒に毎授業後に書かせたポートフォリオから、自己理解や意欲の向上、授業の効果に関するコメントが幾分見られた。しかし、これだけでは読解力の向上が「読解力×問い」のカリキュラムだけのものではなかったということは言い切ることができない。事前テストから事後テストまで半年以上の期間があり、読解力が各教科やその他教育活動の中で育まれたものであることも事実である。今後は、カリキュラム自体の評価を抽出しようと考えているが、その方法は模索段階である。

イ 令和3年度のアウトカム（成果目標）について

(ア) 民間テストについて

民間テストの結果と「高いレベルにある生徒」をSとAに定め、その割合を表3に示した。3つの思考力の内、批判的思考力、創造的思考力は20%を下回ったが、協働的思考力が33%と高いことが分かった。全体としてSAの割合は21.0%と目標を達成することができた。

表3 民間テストの結果

	SA の割合
批判的思考力	16.9%
協働的思考力	33.7%
創造的思考力	12.4%
全体	21.0%

(イ) 模擬試験について

模擬試験の3教科（国・数・英）平均偏差値50以上の割合を1学年7月と11月を比較すると、56.6%から61.6%と5%向上し、目標を達成できた。

4 令和4年度の目標及び取組内容

(1) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

2学年の総合的な探究の時間において、自らが設定した探究テーマに対して、仮説を立て、教科等における探究手法を取り入れて、PDCAサイクルで論理的思考力を高める。外部人材（大学院生や同窓生等）から評価を受け、生徒が自己・他者評価を記録し、探究テーマ・方法について改善を進められる。

イ アウトカム（成果目標）

(ア) 民間テストの指標である読解力、論理的思考力及び表現力が高いレベルにある生徒の割合が25%以上になっている。

(イ) 模擬試験（2学年11月）の3教科（国・数・英）平均偏差値50以上の割合が+4%（7月比）になっている。

(2) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

1学年は、「読解力×問い」のカリキュラムの評価によって見えてきた課題をもとに改善を行い、授業を展開する。また、事前事後の読解力テストも継続して行う。

2学年においては、探究活動の中の、問いを「論証する」という段階において、「論理的思考力」の育成を行う。「現代社会が抱える諸課題の中から仮説を立てる」、「仮説・検証の意義、検証の可能性等を検討する」、「検証を進める中で、他者の改善点を生徒どうしで相互に共有する」等の取組を行い、生徒どうしが互いの研究内容を理解した上で意見を交換する中で、自らの研究そのものを問い直すことで考えを深め、論理的思考力を育成する。論理的思考力が育成できたかの評価や、「論理的思考力×論証」のカリキュラムについての評価は、可能であれば民間テストを用いて行いたい。

イ 校内体制

実行委員会を兼ねるカリキュラム・マネジメント・ミーティング（以降CMM、主担当者所属）が、総合的な探究の時間と教科・科目の学習を有機的に結び付けるため、各教科会議及び総合的な探究の時間プロジェクトチームとの連携を活性化し、カリキュラム開発を全教員が参画して行う。

そのために各教科で、取り組むべき資質・能力を焦点化し、それを向上させるための授業づくりについて各教科会議で協議し、その内容をCMMで報告させ、それを踏まえてカリキュラム開発を進める。

生徒が身に付ける資質・能力に係る学習状況の評価についても、各教科会議で焦点化した資質・能力を評価する方法を検討する。具体的には、本校定期考査において必ず出題する活用問題を分析し改善を図る。解答内容及びルーブリック評価等から、読解力、論理的思考力及び表現力を出題時の目標と比較して適切に測ることができているかどうか分析し、課題をどうすれば改善できるか等を検討する。このようにして、各教科・科目の問題作成能力を高め、将来的に資質・能力を測る適切な問題作成能力を全教員が身に付けられるようにする。

総合的な探究の時間においても、1学年で読解力、2学年で論理的思考力、3学年で表現力を身に付けられるように、評価を工夫する。そのため、生徒が自己評価や相互評価をするための指標づくりを明確にする。具体的には、それらの指標を基に、生徒が自らに問いかけたり、他の生徒に質問したりすれば、適切な評価ができる指標づくりを目指す。